

[野菜部門]

3. トマト葉かび病に対する感染前薬剤散布の有効性

[要約]

トマト葉かび病に対する薬剤防除は病原菌感染後の治療効果に比べて、感染前散布の予防効果の方が防除効果は高い。

[担当] 病虫研究室

[連絡先] 電話 086-955-0543

[分類] 技術

[背景・ねらい]

県内の雨除け夏秋トマト産地では、葉かび病による収量・品質の低下が問題となっており、薬剤防除方法によって被害の発生程度に違いが見られる。そこで、現地で使用されている薬剤の予防効果と治療効果を明らかにし、葉かび病の効率的な薬剤防除の資料とする。

[成果の内容・特徴]

1. 葉かび病菌接種前の薬剤散布では、アフェットフロアブル、カンタスドライフロアブル、プロポーズ顆粒水和剤、ダコニール 1000 及びルビゲン水和剤で安定した高い予防効果が認められる。次いで、ベルコートフロアブル、トリフミン水和剤、アミスター20フロアブル、カスミンボルドー及びゲッター水和剤で高く、ポリオキシシン AL 水和剤は効果がやや不安定である。トップジン M 水和剤や生物農薬のインプレッション水和剤、タフパール、エコショットは効果が不安定ないしは劣る（表 1）。
2. 葉かび病菌接種約 1 週間後の薬剤散布の治療効果は、全ての薬剤で予防効果よりも劣り、しかも、安定しない（表 1）。

以上の結果、現地ではトマト葉かび病感染前の薬剤散布が有効で、アフェットフロアブル、カンタスドライフロアブル及びダコニール 1000 等の予防効果が高く安定している。

[成果の活用面・留意点]

1. 本試験はガラス室内の 5 葉期のトマト株（プランター栽培）を用いて無処理区の発病程度を中～甚発生条件で行っており、現地における防除効果とは異なる場合がある。
2. 病原菌の感染から発病までの潜伏期間はいずれの薬剤も防除効果が劣る。

[具体的データ]

表1 トマト葉かび病に対する各種薬剤の予防効果及び治療効果

供試薬剤（希釈倍率）	予防効果		治療効果	
	試験事例	防除価 ^z	試験事例	防除価 ^y
アフエットフロアブル (2,000倍)	5	100	4	43 ～ 99
カンタストライフロアブル(1,000倍)	3	100	2	19 , 42
プロポーズ顆粒水和剤 (1,000倍)	3	100	2	0
ダコニール1000 (1,000倍)	3	98 ～ 100	2	0 , 28
ルビゲン水和剤 (6,000倍)	2	95 , 99	1	35
ベルコートフロアブル(2,000倍)	3	85 ～ 95	2	8 , 21
トリフミン水和剤 (3,000倍)	5	74 ～ 100	4	32 ～ 98
アミスター20フロアブル (2,000倍)	4	70 ～ 100 ^x	3	14 , 33 ^x
カスミンボルドー (1,000倍)	2	78	2	10 , 45
ゲッター水和剤 (1,000倍)	2	74 , 76	2	31 , 52
ポリオキシシンAL水和剤 (1,000倍)	2	58 , 92	2	6 , 65
トップジンM水和剤 (1,500倍)	2	58 , 63	2	13 , 31
インプレッション水和剤 (1,000倍)	2	24 , 89	2	0 , 7
タフパール (2,000倍)	2	19 , 62	2	1 , 7
エコシヨット (1,000倍)	2	13 , 42	2	0 , 4

^z 防除価は株当たり病斑数より求め、行った試験の中で最小～最大の値を示す。
無処理区は多～甚発生条件。

^y 防除価は発病度より求め、行った試験の中で最小～最大の値を示す。
無処理区は中～多発生条件。

^x 接種に供した菌株はアミスターに対して感受性の菌株である。

[その他]

研究課題名：雨よけ栽培トマト葉かび病の多発要因の解明と総合的防除技術の確立

予算区分：交付金（病虫害防除農業環境リスク低減技術確立）

研究期間：2009～2011 年度

研究担当者：金谷寛子